

悪は実際に悪いのであるが、思弁的な理論によって善く見えるだけなのだろうか。」(p. 362) Hは両者の関係の問題を残して、その懸け橋は神の国への希望であると言う。そしてこの paradox は、5 C. のはじめないし 7 C. 以来 (p. 244), 教会で歌われつづけてきた聖歌に表現されていると言って、それを引用することによって本書の論述を終える。

O felix culpa quae talem ac tantum meruit habere redemptorem.

WERNER BEIERWALTES : *Identität und Differenz*

Zum Prinzip cusanischen Denkens

Vorträge/Rheinisch-Westfälische Akademie der Wissenschaften :
Geisteswiss.; G220, Opladen 1977, Westdeutscher Verlag.

八 卷 和 彦

著者 Beierwaltes は、*Platonismus und Idealismus* (1972) なる大著の著者として既に熊田陽一郎氏によって本誌 XVII 号 (1975) で紹介されたことがある。この著作は、前者に比すれば言わば小冊子の如きものであるが、その Problematik においてはそれと密接に関わっている。即ち Nicolaus Cusanus (以下 C. と略す) の思想を、形而上学の、とりわけ新プラトン主義の歴史に立って考察すると共に、さらに彼より後の Hegel との関係を考察し、また (とりわけ興味深いことには) Heidegger をも検討の対象にしているのである。この事により、前著では考察が Meister-Eckhart から一足飛びに近代の Novalis, Goethe, Schelling および Hegel まで移動していたという欠落を補い、その論旨をさらに充実させていると考えられるわけである。この点においてこの小冊子は、単に C. 研究書にとどまらない大きな意味をもっているであろう。

先ず〈I〉において著者は、形而上学の思惟がその始まり以来、本質的に Identität と Differenz の関係への問によって規定されており、またこの問は終始 Ein-

heit と Vielheit への間、および Gegensätze の意味と機能への間と分ち難く結合している、と言う。また Plotinos のように Prinzip の differenzlose Einheit を sich reflektierende Differenz から区別することは、哲学的に刻印されたキリスト教神学（例えば Marius Victorinus）を、ein sich trinitarisch reflektierender Gott という概念に到達させた。しかしこの神概念において Differenz は、それと同じく本質的契機としての Einheit に対してその力を失なってしまっている、とされる。

次に〈Ⅱ-1〉において著者は、C. が infinitum と finitum とを原初的であつ貫通的な根本的区別で分ち、同時に結合していることに着目する。finitum とは、自己自身には identisch であるが、他の identisch なものに対してはその Differenz が成立するものであるから、Endlichkeit なる概念は〈Identität と Differenz〉なる原理から生じている。また finitum は Seiendes を意味しており、従ってあらゆる Seiendes が縮限というあり方で (verschränkt, contracte) Identität と Differenz に規定されている。

ところで〈Identität と Differenz〉は既にふれたように〈Einheit と Andersheit〉の関係においても把握されうるので、C. においては上述の内容が unitas in alteritate という形でも表現されている。ここで考えられている存在者の領域は、Einheit が Andersheit の中に自己展開することなしには、また Andersheit が自己に内在する Einheit によって万物の根源としての die gründende Einheit に還帰すること (ἐπιστροφή) なしには存在不可能である。しかし Andersheit とは、全ての存在者が各々の Einheit と Identität に基づいて Anderes (他者) ではない、という事態、およびそれ故にそれ自身も他者として思惟されうるといふ事態の表現にすぎないのであり、従って Andersheit は principium essendi ではないのである。

また finitum と根本的に区別されている真の infinitum, negative infinitum は、測定可能、比較可能なものの Dimension (即ち Identität と Differenz の介入している Dimension) を超えて、あるいはそれらの外に、自己の内存在しているのであるから、Zusammenfall oder Aufgehobensein der Gegensätze として理解されるべきであり、さらに、そこには Gegensatz あるいは Verschiedenheit は存在しないから、infinitum は何物にも対立することなく、また何物もそれに対立することはない。従って infinitum としての神は die absolute Differenz selbst ohne Dif-

ferenz である。

次に〈Ⅱ-2〉において著者は、C. の思惟に特徴的な（C. の著作の表題ともされている）三種の神の“名称”，もしくは神的根源の aenigma 的表示である non-aliud, idem および possest を検討する。

これにこめられている思想が〈Identität と Differenz〉の関係に関わることは、〈complicatio と explicatio〉という、同時に C. に特徴的な思想が明らかになる。即ち、あらゆる対立性に先立って存在している coincidentale Fülle des Seins および absolutes Sein und Denken の自己自身との Identität を complicatio が意味するのであり、他方、相異なる Intensität で das ‚universum‘ des Seins を構成するものとしての Identität と Differenz の関係において、absolute Identität が差異化すること（Differenzierung）を explicatio が説明するのである。

従って non-aliud, idem および possest は、いずれも同様に絶対的超越的存在のための、また Differenz あるいは Andersheit の領域に内在する神的原理（Prinzip）の Wirken のための aenigma 的名称であることがわかる。

さらに〈Ⅱ-3〉では、この原理の三一性が考察される。つまり、この Selbstidentität は、動機づけは神学的であるが構造的には哲学的に思考されているのであって、それは三一的であつ in sich relational である。この Selbstidentität は、そこでの Einheit および Identität という概念への Reflexion から Differenz なる概念を明らかにする。この自己内での Differenzierung が神学的な父、子、聖霊に対応する。

以上のように C. の思惟における Identität と Differenz をとらえてくれば、これと本来的新プラトン主義との関係も明らかになる。先ず Koinzidenz-Gedanke であるが、純粋な新プラトン主義的思惟にとっては専ら絶対的 *vous* の領域でのみ思惟されるものであって、一者そのものは、関係をもつことなしにそれ自身において das absolute Nicht-Viele である。しかしキリスト教の思惟において、また C. においても、*vous* と三一的存在が神的原理の Identität として考えられるようになっており、それによって Koinzidenz-Gedanke が神的原理にとって決定的に重要なものとなっているのである。

次に C. が世界を *infinitas finita, deus creatus* 等々と規定することがあげられ

る。彼は神学用語としての Schöpfung と Inkarnation への哲学的思惟に導かれて、Prinzip によって措定される存在者の内に Prinzip が内在することを、存在者を高く評価するために考慮に入れている。これは新プラトン主義とは本質的に異なっている。

また神の aenigma の一つとしての possesset は、Plotinos の一者の思想に、即ちそれ自体は形なき（従って規定されていない）、あらゆる Etwas に先立つものとしての一者が、同時に万物に対する原理として働く能力であり、あらゆる規定性の根拠であるという思想に由来している。

さらに C. においては、die trinitarische Einheit が、多様な名称による Prinzip の自己表現の全ての Aspekt の der Eine Bezugspunkt であるから、彼の思惟を、Seinsmetaphysik（下からの形而上学）と区別した上での Einheitsmetaphysik（上からの形而上学）として Plotinos と並べて規定することには殆んど意味がない、として従来の説が批判されている。

次の〈Ⅱ-4〉においては、従来も断片的に言われてきた Hegel（以下 H. と略す）の Dialektik と C. との親近性が問われる。それは単に外面的、偶然的な視点からではなく、die geschichtliche Gestalt absoluter Reflexion という観点からなされるのである。従って、両者の間に文献的に証明されうる影響関係があるか、というとかく問題にされる事柄を、著者は意に介していない。

先ず両者に見られる〈対立の一致〉の概念について著者は、C. ではそれが神的 Einheit において常に既に成立しているが、H. では Resultat としてとらえられている、とする。

Negativität に関しても、C. ではそれが、有限者の Dimension での abgrenzende und bestimmende Andersheit であるか、あるいは〈対立の一致〉としての absolute Negativität oder Differenz であるが、他方 H. では、das Werden zum Idee における das bewegende Element として、言わばぜんまいのようなものである。

また Trinität (Triplizität) における両者の相異も指摘される。C. のそれは die trinitarisch-reflexive Selbstidentität として、人間にとっては常に negative Theologie の der conjecturalen Vorbehalt の下にある。しかし H. のそれは、自己内に Moment der Andersheit を必然的にもっており、das Sich-selbst-anders-Wer-

den を根拠として成立しているのであるから、H. の意味での absolute Reflexion は das endliche Denken als ein Moment an ihr (der absoluten Reflexion) にも貫かれている。

以上のように綿密に両者の相異を指摘した上で著者は、両者が新プラトン主義的形而上学に基礎を置いてその思弁的伝統に立ちつつも、同時に各自が異なった変形を行なっているという形での親交関係を結んでいる、とする。C. と H. との関係を次のように要約的にとらえている。前者では、絶対的一者 (non-aliud etc.) が被造的な多に対して ein inkommensurablen Bezug をもっていると考えられたのを、H. が、eine sich selbst in ihrem Anderen reflektierende, absolute Einheit の中に多および対立を揚棄する、という構造に変形したのである。

最後の〈Ⅲ〉において、著者は以上のように C. および彼の新プラトン主義的思惟への関係を考察したことをふまえて、Heidegger (以下 Hei. と略す) の思想の検討に入る。著者は Hei. の „Seinsvergessenheit“ als ein Grundzug der abendländischen Metaphysik というテーゼも、Identität と Differenz への間の地平でとらえられているものである、とする。しかし、Hei. のこの geschichtsphilosophisch なテーゼおよびその説明としての、〈「形而上学」の存在は常に存在者の存在にすぎず、この関係によってそれ自身も存在者である〉という主張、および〈「形而上学」は Differenz を思惟していない〉また〈「形而上学」はその onto-theologische Verfassung に基づいて、Prinzip の意味での存在を常に存在者として、Etwas として表象している〉という主張が、はたして die tatsächliche Geschichte に適合しているか否か、という問題を提起する。

そして、Hei. の既公刊の著作の中には新プラトン主義的思惟との討論の跡が見出されないこと、およびそれにもかかわらず Hei. の哲学形成期に既に多くの研究者によって新プラトン主義的思想が紹介されていたことを指摘する。さらに著者は、Plotinos の πάντων ἕτερον oder οὐδὲν πάντων としての一者は、C. における、Sein と Seiendes (esse et id quod est)、Sein と Nicht-Sein の全ての Differenz に先立つ esse absolutum の根本特徴としての non-aliud etc. に他ならないことを前提的に再確認する。

これに基づいて著者は次のように結論づける。第一に、一者は確かに Hei. の言

うような存在者を根拠づける Grund であるが、同時にそれ自身に関わっては Grund および Ursache ではないこと、第二に、新プラトン主義における Prinzip は das Sein ではなく das „über-seiende“ Eine であること、第三に、Prinzip は ab-solute Differenz として存在者でも Etwas でもないことから、Hei. のテーゼは新プラトン主義的思惟には決して妥当しないとする。

むしろ Hei. が、„...daß Sein nie west ohne das Seiende“ (*Was ist Metaphysik* 第5版の結語)と言う時に、彼こそ das Sein „Es Selbst“ を取り上げていないと指摘する。さらに彼の *Platons Lehre von der Wahrheit* の中で、「真理がアイデアの軌の下につながれて Richtigkeit になっている」という主張は、Platon から (Aristoteles を除外して) Plotinos に受けつがれ集約されている〈絶対的存在の根本特徴としての真理〉という思想を隠蔽している。むしろこの思想は、Hei. の〈Sein と Wahrheit〉の歴史の構成を刺激してきているはずであるし、それを是正するに違いない、とさえ言う。

以上の Hei. に対する批判は、著者自身によって限定されて、専ら Hei. の die geschichtsphilosophische Grundbehauptung に対する批判の端緒が意図されているだけであると言われている。しかしながらまさにこの点が Hei. 哲学の根幹の一つでもある故に、この批判は容易ならざるものであるだろう。だが残念ながら、評者は目下のところこれ以上立入った評価をする用意がない。

さて、本書を通読して気づかされることは、著者の広くかつ深い思索によって行論全体が極めて緊密に構成されており、従ってそこに出されている判断は大いに説得力をもっていることである。これと比べれば、哲學家 J. Hirschberger によってほぼ同時期に書かれた *Die Stellung des Nikolaus von Kues in der Entwicklung der deutschen Philosophie* (1978) はいささか内容の薄いものに見える。しかしながら評者が不満を感じる点もないではない。確かに C. の思惟の Prinzip は〈Identität und Differenz〉と関わっている。しかしその関わり方は、単に言わば〈思惟のための思惟〉としてではなく、キリスト教的に変容されているのであるが、この側面が、(著者のテーマ設定にも由来するのであろうが)十分に顧慮されていないように思われる。著者はくり返し「神学的に動機づけられながら哲学的に思惟する C.」と述べているが、この事態が同一の人格において成立している点が考慮

されるべきだろう。

またこの点と密接に関わる事であるが、神の *aenigma* としての *possest* に関して、著者はその三一性に言及しつつも十分に考え抜いてはいないように思われる。評者はここに *<exemplar—imago>* の関係が設定されており、そこから人間も関わるものとしての「擬三一的垂直構造」が抽出できると考えている（拙論『*Omnipotens Deus* の復権』）が、その方向への考察はない。この著者による一層包括的な *Cusanus* 論に期待したいと思う。

Martin Grabmann : *Gesammelte Akademieabhandlungen.*

Herausgegeben vom Grabmann-Institut der Universität München.

Paderborn-München-Wien-Zürich, Ferdinand Schöningh, 1979

(Veröffentlichungen des Grabmann-Institutes zur Erforschung der mittelalterlichen Theologie und Philosophie, Neue Folge 25/I und II), pp. 2220

K. リーゼンフーバー

ヘーゲルから根本的影響を受けた19世紀中葉のチュービンゲン学派が消滅した後、カトリック神学の潮流は中世の伝統、とりわけボナヴェントゥラとトマス・アクィナスへの実り豊かな研究に向かった。この傾向は続く一世紀間の神学に決定的な刻印を残したものである。ところで、中世哲学・神学史の先駆的研究者のなかで、エールレ及びポィムカーと並んで、神学史家としてのマルティン・グラープマンの業績は傑出している。ミュンヘン大学グラープマン研究所は彼の生誕（1875年）100年を記念して、中世思想史に関するグラープマンの研究を大部な二巻本として刊行した。これは1921年から1944年までにバイエルンとプロイセンの「学術アカデミー」（*Akademie der Wissenschaften*）の会議報告書及び研究論文集に発表された論文の集大成である。ここに収められた23の広領域にわたる論文はグラープマンの作品